

繪本淨瑠璃理姫譚三卷

じょうりひめものがたり
浄瑠璃媛物語巻三

東都 狂蝶子 文麻呂 著

みぶのこざる
○壬生小猿

そのころよ きこ みふ こざる もの
其比世に聞えたる、壬生の子猿といふ者あり、熊坂が手下の者
にて、ぬすひと おも につた あや
盗人とのミ思へるハ、伝への誤まれるなり、生れハ都の者
なりしが、かね あづま ぶし
兼て東の武士なつかしく、さるべき者に、武芸を
まな おも お
学ばんなど思ひ居りしに、また童なりし時、あやしき人にあ
ひて後、のち ゆへ くまさかてうはん かたき
故ありて熊坂張樊を敵になし、君父の仇にハあらね
ど世愁をも除く心かた／＼にて、ひとたび田楽などのいやし
きわざをもなし、こつしきすがた み やつ
乞食姿にまで身を棄して、ねらひしか
かども、くまさか うんめい つき
熊坂が運命や尽さりけん、其便を得ざりしに、熊

さかにうどう きちじ もの
坂入道が、吉次が物を、奪ひとらんといふ企を聞て、よきをり
からとおもひ、いつ てした
偽ハリ手下にぞなりける、やがて青墓の大炊
が内へ、うち らんにう おり かげ
乱入せし折、影のやうに附そひて、後疵を負せければ、
くまさか
熊坂たやすく討れにけり、此時牛若丸の、千変万化の御働
きハ、ここんみそう よ し ところ
古今未曾有にして、世の知る所ながら、小猿が助もあり
けるなりとぞ、かたき うち
敵ハ打とりぬ、今ハ世に望ミもあらねど、
ふるさと かへ
故郷へ帰らんにも、よき武士にならずバ、何の面ばせありて父
母にハ見ゆべき、などおもひつゝくるに、よき主もなくて、三河
あたりに住ひけるに、ころも さと あた
衣の里の辺りありきて、是も瑠璃君を
かい間見てけり、こざる わか おとこ
小猿もまだ若き男にて、世にハまれなる美
男ながら、つね いろこの こころさら
常ハ色好ミの心更になかりしを、いかなる事にか、此君

を一目見るに、あはれ男おとこに生れつる果報くはほうに、此やうなる妻持つまもち
てあらばや、今こそハ落おちぶれたる身みなれ、我われとても筋すじわ
ろき者ものにも、あらぬをとハおもへとも瑠理君るりきみハ武士ものゝぶめきし
豪家かうかの娘むすめなれば、しのびよる事ことだに叶かなはず、桂かつらの花はなの心こゝ
地ちしたるに、ある夜瑠理君よるりきみの御みふしどに、琴ことぶえ笛ふえのしらべ聞きこゆ、
小猿こざる田楽でんがくをせし折をり、笛ふえも吹ふきしかバ、それも聞きがてら、且かつは
男をとこの通かよひであるなどおもひ、縁えんの下したに忍しのびて伺うかかふ、此時このとき
牛若うしわかの宿やとりておハしけるが、耳みみそハだて給たまひて、今此吹いまこのふきもの、
弾物ひきものに殺伐さつぱつの音ねの交まじるハ、あやしき人しのや忍しのぶならんとて、
牛若うしわかミづから立たちて端はし近く出給いでへバ、折おりのわろかりしとて、
庭にはへ這出はいいでんとするに、春雨はるさめの名なこりにて水みづたまりのありけるに、

牛若丸うしわかまるの影かげうつりぬ、青墓あをはかにてハ物騒ものさわがし折をりにて、慥たしかに覺おぼへ
ず今思いまおもはずに見みて、牛若丸うしわかまるとハしらねど、驚おどろきあやしミつゝ、
其夜そのよハかへりけり、扱さていつの夜よにか忍しのばんとおもふ程ほどに、小猿こざるが
恩をんになりし人ひと、信濃しなのに煩わづらひ居あて、よびにおこしければ、それも
心苦こころくるしくて、信濃しなのへぞ下くだりける、其内そのうちにもたゞ、瑠理君るりきみの
事ことをバ忘わすれざりけり、かゝる程ほどに衣ころもの里さとの、花盛過はなさかりすぎぎにけれ
バ、瑠理君るりきみハ矢矧やはきの屋敷やしきへ帰かへり給たまひぬ、白糸しらいとが牛若丸うしわかまるを思おもひ
奉ことる事をバ、瑠理君るりきみばかり、心こゝろの内うちに知しらせ給たまへども、更さらにいひ
出給いではす、まことにかの牛若丸うしわかまるハ、熱田あつたより直すくに木曾路きそちへ下くだせ
たまひ、矢矧やはきへ寄よらせ給たまはぬを、長者てうしやハ本意ほんいなき事に思おもふ、
木曾きそより吉次きちじにかゝせたる御文ふみ、白糸しらいとが名なかきておこし給

へれど、秋あきならでハ参まいりがたしとあり、瑠理君るりきみハ遠とほき所ところの
別わかれなれば、かゝるへしとハ兼かねて、おもひまうけておはしたれど、
忘わするゝ間まもなく、物ものおもひの病やまひ更さらかへりて、逢あわせ給ほとハぬ程ほどより
も、勝まひりて見まへ給まへば、左さ近こんハ中なか々なかなる事こと、仕しいたりと思おもひ
納す涼みにもかの、別へつ荘そうこそよろしからめとて、父ち君きみの長てう者じや乞こひて、
ふたゝひ別へつ荘そうへうつし参ませつ、爰こゝハ人ひとけも遠とほく心こころおかぬ
人ひと々の、ともく牛うし若わか丸まるの事ことなど語かたりあへば、瑠理君るりきみも夫それ
にまぎれて、御み煩わづらひハさハやき給たまふかたなれど、はじめしば
しのほどの御み旅たび寝ねに、たゞならぬ御おん身みにさへなりたまへば、
勞らう瘵さいの病やまひ打うち添そへてハ大たい事じなりと、見みえ、げにそれも理ことりなる
はからひとぞ見えし、何なににつけても白しら糸いとハ、瑠理君るりきみに牛うし若わか

とられし事ことの口くちをしく、主しめいたる兄けう弟だいなり、ましてよき中なか
なり、おもふまじとハ、いく度も思おもひかへせど、さすがにねたまし
く、此この度たびも例れいの御おん供ともにて別べつ荘そうに來きたり、打うち嘆なげきつゝおもひ
あまりて、せめてハ髪かみをだに、媛ひめ君きみのやうに結ゆひて、果く報はうにも
肖あやなりとおもひ、ある夕ゆふぐれおのが部へ屋やにて、姿すが見たみの鏡かざ立たて、
けふハミづから髪かみ結ゆひてをりに、あなあやしや牛うし若わか丸まるの御み顔かほ、
鏡かざの中なかに移うつりて、又またたちまみに見みえずなりぬ、大おほに驚おどろきて、
まだ秋あきにもならず、道みちよりの御み文ふみもなく、不ふ意いに來き給たまはん
やうなし、我わが思おもひなしにて、ふと見みえしなるべしとおもひしが
またおもひけるハ、世よを忍しのぶ御おん方かたなり、まして待まちつけをる人ひと驚おどろ
かして、戯たはふれとなし給たまふにやあらん、過すぎし日ひハ左さ近こんが案あ

内せしを、此度ハわれしるべして、押たちても、逢ひ奉るべしと
おもひゐたり、程なく日も暮ぬれど、何の音づれもなし、さ
れど心に待て奥へも行ず、今宵ハ左近にも、知れぬ様に
入来給ふならん、さらばわれもやうありとて、瑠理君よりゆ
づり給ひたる、紫裾濃の紗の単を着つ、夏も冬も同じ
紋にて、藤を縫にしたる物なり、是ハ瑠理君の、あつらへ給ふ
縫紋にて、白糸の下画かきしものなり、是も養ひ親の藤
原を、おろかにおぼさぬゆかりとぞ聞えける、此辺に此やうの
物着るものなし、媛君のやうに髪ゆひしこそ、よかりつれ
とて、瑠理君の御方へハ猶もゆかず、おのがつかふ女の童に
いひ含めて、今の程いさゝか心地あしければ、しばし過して参

んといはせて、瑠理君のまねして、影のさしける縁にたゞずミテ
待をりしに、宵やみに松明もともさで、忍び入る者あり、
近くよれば白糸小声にて、牛若君にかと問へば、折しも
軒に釣りたる、籠の螢、心ありげに光りあひて、ほの見るに、
牛若丸の御おもぎし、まがふべくもあらずすこし笑ミたまふ
ばかり、これも小声にて、音するなどて手かき給ふ、衣の香りも
つねよりハ薄く、縫ざまの違ひし衣服着給ひつ、それハ白
糸などをすかす為にかと、瑠理君の声音をまねて白糸
がいへバむととうなづき給ふ、さらば爰にて語らんとて、内へ入
に、火の影を指さして、あれそむけてよとの給ふさまなれば、
げに人々にしらすなぬが、一興なりとの御心ならんとて、教へ

給ふまゝに、片隅に取のくる程、例の女の童来かゝりしをも
あちへとてかなたへ追やり、閨へともなひて入る、わざと瑠璃君
めかせて、かれ／＼なる恨ミをいへば、息の下へ引いるゝやう
にのミ、わづかにいらへし給ふ、白糸又しばし逢させぬ程
に、おとなひ給ふ御声かなといへば、恨めしくおもひたまふ
かなとの給ふ、白糸が心にハ、我を瑠璃君と、おもひ給ひしな
らんとおもひ、打とけて語らふ、うれしき事限りなし、今ハ
名を明して、白糸ぞといはんとすれど、はしたなく恥かしう
て、いひも出ぬ内、ついたちて縁に出給へば、御袖にすかりて、同
じく出れば、目にてのミいとま乞して、又もとの扉を越へて
出給ふ、白糸八年頃の望も足りて、うれしともうれしけれど

扱もはかなき事かな、またの折をも契らでと思ひつゝ、扱ハ
われをバ猶媛君とハ覺さず、われにも心ありて忍び給ひし
なりけり、過にし折もにくからぬものに、おぼし給ひし様なり
き、さるこそハ媛君のまねせしハ、嗚呼なる事にてありけり、
さてハなど其事を、少々もの給ハざりしにやと、不審晴ねと、
人にいふべき事にあらねば、たゞ心にのミ嬉しくて、すこしは
思ひもやすまりぬ、そも今宵忍び入りたるハ、誠ハ壬生の
小猿にて、過し頃庭たづミの影にて、わが姿の牛若丸に、似
たりし事をしりて、牛若丸に似せて忍びしなりけり、されバ
小猿ハ瑠璃君に逢ひしとおもふに、白糸ハまた牛若丸ぞ
とおもひて、互ひに人たがへせしことをしらず、共に月ごろのもの

おもひはるけぬとて、よろこひける、さてもおもはずなる、妹背の
かたらひにぞありける

○横笛

誠なるかな、日月明らかならんとすれば、浮雲これをおほひ、
江河清んとすれば、沙石これを濁す、瑠理君の御身の上にも、
ひとつの妨げぞ出来にける、其頃宗盛公の御家人に、男衾
源太夫といふ者ありけり、平家の侍多き中にも、殊がほかの
きり物にて、常に目代にぞせられける、此度本国武蔵の国
に、所用ありて下なれば、其ついでに東の海道に、平家をね
らふものを、吟味せよとの仰蒙むりて、此三河の国へ下つき
ける、藤川のあたりにも領所あれば、当時岡崎に住居したり

ある日衣の里を通りしに、長者が別荘にて、横笛の音なつ
かしう聞えけり、源太夫心ねぢけ、且ハるかびたる者ながら、
さすが久しう都にゐなれて、平家のたてゝ好める、糸竹の
道をも、かた耳に留めしかば、立どまりて聞に、常ならぬ音なれ
バ、能も義朝が手なれし、漢竹の音色に似たるかな、いかにして
いかなる人の、長者が家にて吹らん、いづれ源氏のゆかりのひと
ならんとおもひ、ながら、ひそかに近き辺の人に問へば、よく知
たる翁ありて、あれハ瑠理君といふ、娘の吹すきミ給ふなりと
いふ、扱ハ女のわざにや、いミじき上手なりといへば、其翁源太夫
とハしらでいへるやうハ、やさしくも問ひ給ふ殿かな、抑あ
媛君ハ、音曲の名人のミならず、海道一の美人にてまします、

いはんや、あの長者も先祖ハ、大將軍八幡太郎殿に、奉公

せし苗裔とて、あの女君をハ、国守の北の方にも、奉らんと

兼ておもひおきてたりと、口ずさませて語る、源太夫年ハ

三十五ばかりにて、色黒くひらつらにて、肥ふとりたるむくつけ

男なれど、かゝる者の癖として、常の人よりも、色好のこゝろ

ふかく、瑠璃君が美人なるを聞て、見ぬ恋にあこがれつゝ、

いかで其女、我物にせばやなどおもひけれど、俄にことなる

べきならねバ、まづ其日ハかへりけり、すべて目代といふものハ、

訴訟を聞、事の沙汰をして、勢ひある物なれば、我聳に

ならんといはゞ、一定うれしき答へするならんとおもひ、国

守に参らせん心ぞとハ、翁もいへりしぞとて、心おこりし

つゝ、やがて長者が許へ、出入する者をよびて、まづあだめきし

事をバいはで、笛の上手なる事を感じれば其男何の心も

なく、親たちだにしらねバ、君ハまして知しめさじ、あの笛は

娘の隠し男が、あたへし物ぞといふ、源太夫聞もあへず、いかに

男が定りしとか、されバ候此娘、まことハ某殿とか申せし、

公卿の媛君にて、都人ならでハ、御妻にまいらせしといひ

しが、此頃金売吉次といふ者、都よりうつくしき児を連れ

て下りしに、人しれず逢初しなり、其児信濃へ下らんとて、

其記念に留置つる笛なり、但まだ熱田に居るやらん、夫ハ

知り候はずといふ、源太夫よく聞すまして、さて恋暮の事

いひ出で、すぐに其男を語らふ媒の習ひにて、事しげに云

なす、源太夫ます／＼心高くなりて長者の方へいはせける
やうハ、おのれ年頃形ある女を望みて候ひしに、御娘には
美人の聞いちしるきのミならず、やことなき人の御胤なる
とハ、ほのかに承ハリたり、国守を簪にとの御願なりとか、
あはれおのれに賜はりなん、年ハ三十にあまりて候へども、打
捨らるゝ男の数にハ候はず、まして六波羅の御覚よく、国守
の片はしに候へバ、御本意のやうに、無類のよき簪にて候はん
とぞいはせける、長者ハかねて、牛若との語らひもほの知り
たり、望ミ叶ひしとおもひをれば、ましてかゝる田舎人のいひ
寄るハ、答へするだにうるさしとおもへど、京都の武士と思バ、
さハラぬやうに答へけるハ、娘が事公卿の御種とさゑ、

知しめされし上ハ、くハしく聞え奉るに及ばず、げにもすがた
容、人なミ／＼にハ生たち候を、外に女もなきやうに、御所望
の候ハ、親子の果報此上も候はず、すなハちにも参らすべう
候へども、爰に難義の候ハ、此娘うまれつき、病かちにて、人
しれぬかたハなる所ありて、更に／＼男持べき心絶果て、近
うちにハ尼にならんと申て候、病者の事なれば、あながち
親のまゝにも仕りがたう、数珠経文を手につれぬ内とて、
此ほどハ琴笛のミにて日を過し候へバ、えせたる者と覚し
切り給へといふ、源太夫案に相違して、さすがに無理業も仕
がたう、つく／＼おもへバ、笛をやりたるもの主こそ、恋の意趣
なれ、其笛よく見て、詮議せんとおもへど、娘をくれぬ心にてハ

事を左右によせて、笛をも見せハせし、よき事あり／＼と
獨笑して、不善人ハ善人の資とハかゝる時なりとて、熊坂に
つゝきての悪党、浅生の松若といふを呼出しける、これハ青
墓の折の討洩されにて、兼て捕へ置たる者なりあの笛盗ミ
てくれよさらんにハ、おのら罪ゆるしてんといへバ、浅生ハ大に
悦び、命にかへつる奉公、いと安き事なりとて、たやすく
領承したりける、是ハ打置て、矢矧の瑠理君ハ、秋にハ必
との給ひし、牛若丸を例の衣の里にて待給へども、八月に
なりても問はせ給はず、孕ミて五月になりたまへバ、御帯の事
も、左近ひそかにまかなひて、まだ父君にハしらせず、よろづ
慰め奉れど、吉次が音づれたになし、かくて白糸も物思ひ

ふかくなりぬ、時につけたり御あそびもあれど、野山の色づく
につきても、心ありたゞしくひそミがちなり、瑠理君白糸が部
屋の縁におハして、秋の哀れを打なかめ給ふ、前なる築
土ハのぼり安き所なるが、おもはずたけたかき男の、此つい
ちに登りさして、小石に縄をつけて投いれつ、あなおそろし
盗人にやとて、内へ入らんとし給ふに、かの男ハ下ていにけん、
石ばかり縁に落ぬ、さすがに白糸に取らせて見給へバ、文を
おしひねりて、石にくゝりつけたり、ゆかりの君にいはでよりと
あり、まがふ方なき吉次が手なれば、瑠理君ハ心ときめき
て、とく読てよと仰らる、白糸開きて見るに、久しう隔りし
苦しさをのべて、扱熱田へ参りをれど、そなたに参らんには、

男衾おふすま（燻）あつた、熱田あつたにて逢参あひらすべき家いへあり、

○旅路たびじのあらし

迎むかへの人よあすの夜しらいととのまいらすべし、白糸しらいと殿とのばかり連つれて、忍しのび出いで

熱田あつたの使つかひが約やくそく束ひの日ひ、八月あつたの十六日つかひなりけり、瑠理君るりきみのうれ

たまへとありて、はしに風かぜの御心みこゝち地ちにて、鳥とりの跡あとのミだれんも、

しき心こゝろにハ、身み籠こもりし苦くるしさも忘わすれて、さかしき白糸しらいと

見みくるしからんとのたまへど、吉次よしかぎが宣旨書つかまつに仕つかまつりつとあり、

をのミたよりにし給たまふ、白糸しらいとよろづはかしくしう支度したくして、

瑠理君るりきみうれしくて、白糸しらいとが手てをとりて悦よろこび給たまふ、白糸しらいとハね

御身をんみをよきにいたはり、我われもうれしけれど、しばしのほどの

たましとハおもひながら、媛君ひめぎみの男おとこ、我わがものにせんとにハあら

御旅たびながら、左近さこんにも隠かくして、いかに尋たづねぬらんなどおもふ、取とり

す、たゞ小猿こざるに逢あひしを、牛若殿うしわかとのとのミおもひをれば、側近そばちかう

集あつめたる事ことハ打捨うちすてて、其夜そのよハ寝ねたるふりして、今いまやくくと

仕つかへ参まらせて、折をりふしの御情みなさけかうむらんとおもふに、是なも慰なぐさ

待夜まつよも、長ながうなりし頃ころほひなり、亥あの刻こゝにもなりて、草笛くさふえの

めけり、御文ふみにハ此事このこと、左近さこんにも忍しのび給たまへ、君きみこなたへ参まり給たまひ

合あいづきこ、例れいの築土ついちの陰かげへ立出たちいで給たまふ、例れい男おとこ築土ついちを

てののち後に、しらせてんと書か給たまひたり、さればたゞふたりのミして、

躰こえて、二人ふたりともにかろく（軽）と、かき抱いだきて出いだし奉こる、爰こゝより

明日あすの夜よの便たよりをぞまち給たまひける、

ハ表おもての門かどちか近ちかけれど、かしこの出入いでいりハ掟おきてきび厳げんしければ、庭にはづたひに

牛若の笛吹給ひし、茶を売る家の脇へ出れば、二挺の
竹輿昇すへたり、かの男もまじりて、ふたりの輿をかきて
行く、遠寺の鐘聞え、狗の吠るのミ道づれにて、さびしき
事はんかたなし、十町ばかりも来りつらんとおもふに、爰
はいづくぞと、瑠璃君の間給へば、雀の森と答ふるを、跡に
乗りたる白糸聞て、熱田へいくに、なかういくぞといふに
輿昇男とりあえず、されば其事にて候、今宵熱田へ参
らんには、道にて夜も明ぬべし、藤川へ伴ひまいらせよと、
牛若君の仰せ給ふ、かしこハ吉次殿の親族の家にて、かの
君宵より行て、待給ふべき約束にて候ぞといふ、ほどなくふ
ぢ川の東、山中の里といふ所へ到りぬ、ここにも男衾源太夫

が屋敷あり、此誘ひ出し者ハ、貉辨次、狼小十などいひて、
浅生の松若が手下の盗人どもなり、是ハ過し頃、松若が源
太夫に頼まれて、横笛を盗ミに入りしが、笛の有所ハ知れ
ず、金売吉次が手にて、書たる文を得たれば、よき物えたり
とて、持かへり、其似せ筆して、かくハはかりしなり、此頃までハ
悪党と聞えし盗人までも、手をよくかきて、文の詞など
よくつづりしとぞ、昔物語にも見えたる、かくて盗人どもハ、
兼て待をるべき、約束しつる、松若にハあハねど、貉弁次まづ
源太夫が門に入て、見参に入らばやといふ、留守の者立出て、
殿にハ今朝都より、同じ目代の方おハして、おもひがけず、
上野の方へ下りたまひしといふ、仕損じぬとハ思へど、なに

ともいはでそこを立出て輿の側へよりて事の相違こそ
出来て候へ、牛若丸にハさがりがたき事の出来て、夜をこめ
て、信濃へ下らせ給ふとそ、道ハしれたれば、いざ追付たて
まつらんといふ、誠にからぬやうなれど、今更にせんすべなく、
又四五里も行く程に、秋の夜もはや明方になりぬ、昼の
歩行いかゞなれば、明なん後へ、いかなる山家へか伴ひ奉ん、
危しともあふき折から、是も旅装束したる武士、跡より
来りて、此ものどもが有さまをあやしとおもひ、輿の中の
声音に心得て、つい立やすらひしが、まづひとりの輿かく
男が、肩骨をとらへて、おのれ達ハ矢矧より来しなど
いへば、其男きと見合せて驚きながら、さやうなる者に

てハ候はずとて、足早に行過るを、引もどして捻倒せば、
残りの三人のものども、輿ハ二挺とも下にすへおきて、こハ、
狼藉なりとて、杖にて打かかるを、右へくゞり左へさけて杖
ことく引奪、あなたこなたへ投のくれバ、ミな叶ハじと
て逃行中に、狼小十八取て返し、さらバ組んと立かゝるを、
組合ふ間もなく取て引ふせ、知るまじとおもふか、おのれ
等ハ、此女君達勾引たる盗人どもな、遁し難し、いざ
おのれが口より白状せよとて、きびしく責問へバ、げに
小盗人にてハ候へども、勾引などハ仕り得ぬ者どもなり、
すべてハ男衾殿の下知にて候、ゆるさせたまへと偽れバ、
かの侍からくと打笑て、扱ハ男衾殿とやらんハ盗

人の大將軍に任官ありしよな、男衾殿をかうけにする
とも、生置べきかとして、刀に手をかくるを、瑠理君ハこしの
内より聞給ひて、誰人の御情かハぞんぜねども、男衾殿
の方人と申さバ、赦してたべ、こなたに子細の候事ぞと
の給ふ程、白糸も興より出来て、ひたすらに留むれば、
さらバ仰にまかせ候べし、いミしき悪党なれども、命
冥理のありつる奴ぞとて、手を放ちておひやれば、狼も
鼠のごとく、頭をかゝえて逃行ぬ、瑠理君興よりまろび
出給ひて、うれしき人もおはしけるかな、神か仏かそも
誰人にておはずどの給ふ、白糸もともく悦びを□へバ、
侍まづかたへの石をかき払ひて、かりの御坐となしつい

ひさまづきていひけるハ、見覚へたまハぬハ、理りにこそ
おはすれ、君の幼なくおハせし時、父君に御勘当蒙りし、
大沼平次と申す者にて、今暁木曾路へ下らんとぞん
ずる折から、かゝる危難の時節に逢ひまいらせしハ、いまだ
主従の御縁の尽ざる所にて候ハん、あハれ是を手柄に、
勘当の御わびも仕らまほしやといふ、瑠理君木曾路
と聞て、ことになつかしくおほす、平次またいひけるハ、まづ
何事に欺むかれ給ひて、是までハいらせ給ひしぞと聞
ハ、白糸さし出て、始終をかたはしかたりつゞく、平次手を
拍て、さてく深くも欺き参らせたり、某が承ハリしは、
牛若君にハ、木曾殿の御ゆかりとて武蔵の国長井の庄の

斉藤別当が方へ下り給ふとぞ、是より矢矧へ帰らせ給ふ

とならば、送りたてまつるも安けれど、それハ却りて物わら

ひにやあらん、斉藤ハ御同家の因あれば、某を召連て下

らせ給はぬか、かゝるよき折とてハ又候ハじといへば、ふたり

共に年若き女の、何の弁へもなく、然るべき事とおもひ

て、それよりしてぞ、此男が御供にて、輿舁男も道中の者

雇て、よろづの賄いとねんごろなり、されど通馴し道筋な

りとして、多くハ間道をのミぞ行ける、行々て五日といふに、上

野の国なる、追分の宿にいたりぬ、爰ハ北国へいく道と、街道

との衢なり、其夜ハ其宿にそ留り給ふ、かく日数ハ立ども、

牛若丸の音づれとても聞ず、白糸と共に打かたらひて、

たがいに、心もとなく覚しけるに、其夜の泊にハ、白糸もお

らねば、いかにぞと驚き給ふ、折から平次来りて、白糸君ハ

此宿の入口より、心地なやましといはせ給へば、宿はづれの

医師の所まで参らせ奉りぬ、あすの朝ハ一所に打たち

給はんといふ、羽打かハす友だちを失なひたまへば、都へ渡る

雁の音もうらやましよう、よろづ覚しつゝけて、心ぼそくも

一夜を明し給ひて、今朝立せ給ふといふに、猶白糸ハ来ず、

平次男慰さめて、更に心づかひし給ふを、今跡より参り

給ふなりとして、そこを出て、同国板鼻といふ所に至りぬ、雨さ

へ催ほし、日も申の時過れど、猶宿もとらず瑠理君あや

しとおぼせば、平次いひけるハ、かの盗人どもおそろしげにハ

候はねど、徒党して参りなバ、多勢に無勢難義にもや

とぞんじ、是迄も街道をすぐにハマいらす、心して泊りも

仕りぬといふに、それも理なりと覚すほどに、小路の向ひ二

町ばかりに、かぶき門の見ゆれば、かしこに宿乞んとて行く、

行て見るにすこし離れたる家なり、豪士とおもえバ、卒忽

にハいかゞぞとて輿なる瑠理君をハ、門に待せ、まいらせて、

庭の方より入て伺がふ、案のごとく武具の類あまた見ゆれば、

げに心にくき人の住家とハおもはれたり、物申さんといへば、

十二三ばかりなるはしたものの出来ぬ、おことの外におとなハおは

さぬか、おことにてハ聞わかたからんといへバ、頼ぶくらしして這

入ぬ、こたびハ主めきし女、一間のかけより出来り、誰人にて

おはずぞといひながら、顔見合せて、和君ハ鬼吉殿か、おことハ

妹のおそのかといふ、互に久しくての対面なりとて、手をとり

てなく、平次いひけるハ、先要事をいはん、女の連ありて宿に

ハ憚りある人なり、爰をおことが家とおもはで尋よりしに

幸なればこよひ宿せよといふ、おその嬉しげにて、仰にや及

候ハん、かくめづらしき見参に、いかで立ながら帰し参せん、

いざ入給へといひしが、頭かたむけて待せたまへ、君にハおさな

きより、御行状よからざりしが、また改め給ふまし、扱ハ

黄泉の父君の御勘当ハゆり候ハじ、いかにやと問へハ、平治

おめぬ顔して、おことにハ眼のおハせぬか、我ハ今かやうに、

堅固の武士となりつるぞ、主の姫君御供して、旅行す

なり、怪し^{あや}し給ふなどて、袖^{そで}かいつくろひていふ、此間^{このあいだ}に輿^{こし}八宿^{しゆく}

へ帰るといへば、媛君^{ひめきみ}おりて内へ入来り給ふ、おその見て扱も

かはゆき姫君^{ひめぎみ}かな、よも偽^{いつ}ハりにハおはさじ、夫^{おつと}なる者留守

にてあれど、善悪^{ぜんあく}ともにとめ参らせん、しかし夫^{おつと}ハ誠^{まこと}に物

堅^{かた}ければ、今^{いま}にもかへり来て、一度^{いちど}も見参せぬ和君^{わきみ}、兄^{あに}と申も

あやしなど、むづかしう申しつべし、よき事の候、此奥^{このおく}に村長^{むらおさ}

が母^ぼの尼住^{あますみ}し家^{いへ}あり、今^{いま}ハ明家^{あきいえ}になりて、我家^{わがいえ}にて預^{あづか}

りたり、今宵^{こよひ}ハまづかしこにねさせ参らせん、鑰^{かぎ}とりて

参らん、しばし待せ給へとて、奥^{おく}へ行折^{ゆくをり}から、雨^{あめ}すこし

ふり出ぬれば、宿^{やど}かすをうれしと覺^{おぼ}して、こゝハゆかりの

家^{いへ}にかと問^とへば、されバ候^{いもうと}あれハ、おのれが妹^{いもうと}なり、心安^{こころやす}く

おぼし給へ、しかし騒^{さわ}がしき世^よの中^{なか}なれば、まことの御名^な

をバ、名^なのらせ給ふなどいひ含^{ふく}めをるほど、日^ひハ暮^くれ果^{はて}

ぬ、おその松明^{たいまつ}ともし、笠^{かさ}なども持来^{もちきた}り、鑰^{かぎ}を置^{おき}ま

ハして候、待遠^{まちとお}にやおハしたるらん、いざとて奥^{おく}なる

家^{いへ}へ案内^{あない}す、いとかここに、住^{すみ}なしたりし家^{いへ}と見^みゆ、や

がて夕^{ゆふ}げの物^{もの}や、何^{なに}やかや持来^{もちきた}りて、よきにあつかひ、扱^{さて}

さきに申せしごとくなれば明^{あけ}なん日^ひ迄^{まで}ハ、夫^{おつと}にもあひ

給^{おと}ふな、音^{おと}せぬやうにておはし給へ、大^{おほ}声^{こゑ}に物^{もの}をいはせ

たまふな、まついかなる御方^{おんかた}ぞと、問^{とわ}んとする程^{ほど}、正屋^{おもや}の

方^{かた}にて、あるじの男^{おとこ}かへりしけはひすれば、おそのハまづ

参^{まゐ}りてとて、聞^きさして出^{いで}て行^ゆく、雨^{あめ}ハしきりに降^{ふり}来^{きた}り

ぬよろづに紛れて、誰もこなたへハ来ず、瑠璃君とただ
二人相すミなり、淋しきにつきてハ、例の白糸をたづね給ふ
に、されバ候あの方ハ、此板鼻の宿にとまり給ふと、さきの
程しらせ来りぬ、雨故に問給はぬなるべしといひつゝ、平
次白糸にかはりて、よろづ見扱ふ、いさゝかの心落居給へども、
すべて旅のそらハ、男だに憂ものなるを、馴たまはぬ女ご
の、まして懐胎にてさへおはせば、自然に心ぼそく、血暈の
心地しきりにて、音をのミなき給ひつつ、黄水をさへ吐せ
給ふ、平次湯をまいらせ、背撫おろしなどすれば、すこし
ハ心ようなり給ひぬ、其ついでに腰のしるしを見て、初めて
しりしやうに、大に驚きて扱ハただならぬ御身にておは

すなきるを、盗ミて売り奉らんとおもふハ、鬼とも蛇
ともいはんやうなき、情なき者どもよとて、いとゞ心くるしき
顔して、さぞなやましようおはせん、例の安神散を、白糸君
よりあづかり置たれば、煎じて参らせんとて、次の間へ立つ、
折ふしおその来り、夫なる者今人々と酒のミてあれば、其
ひまにまゐりしぞといひしが、薬煎じをるを見て、心地
あしきに、看病の人候ハぬもいたはし、わらハ参らんとて、瑠
璃君の御側に来りて、物語りなどするに、腹痛たまふと
のたまえば、庇の間へハかうおはし給へとて、奥へつれ参らず、
しばしありて、薬出来ぬれば、平次持てゆけば、瑠璃君腕
を枕にて、火をなかめる給りおそのハ又呼れて帰りしならん

問へば、なぞてきやうに思はざらん、すべて女といはんからに
操かへぬばかりを、貞女とはいふべきとの給へば、平次いひける
やうハ、さればよきはかり事と申すハ、外にても候ハす、信
濃の国、姨捨山の辺に長者あり、此者武士の果にて、義を
重んじ、身の行方なきものなど隠し置て、頼もしき
者に候が、此頃妻ほしがりて候へば、理を曲て、其長者に
身をよせ給ふまじくや、それと知らさずハ、牛若君をも
忍バせ奉りなん、家ハひろく、所ハ埋れて、更に男衾か
方へしれ候ハじ、まして牛若殿にも、忍びくの御かたらひ
ハ出来なん、扱長かくておハせとにハあらず、平家の穿議
ゆるひなんにハ、其長者男を打捨て、牛若君もろともい

づ地へなりとも行せ給はん、何かハ苦しう候べきといへば瑠
理の君ハ、おもひがけぬ事にて、悲しくもつらくも覺して、
哀れとのミ打嘆きつゝ、涙を一目うけ給ひての給ひけるハ、
かく宿世拙くて、知ぬ国へまでさまよひ来れど、夫におくれ
し、常盤御前とハ、事の様かはれり、我ハまだ牛若殿、
頭におはしましたつ、いはんや其御子をさへ、腹に宿したる
をとの給ふ、平次聞もあへず、それハ柱に膠する喩に似て
候、まだ五月なる和子ハ、諺に申すやうに、水の上の泡なれ
バ、墮胎の葉のませたまへといへハ、聞もおそろしやとて、
声をたて泣給ふ、平次ハよしなき事申出たり、さやうに
嘆き給ひてハ、またもや血暈の起らせ給はん、安神散の

とおもへど、それ問ふまでもなく、いさ薬まいらせ給へといふに、
黄水の後ハ、胸のあたりくるしきやうなり、此折を今少し
しづめて、薬ものミなん、さきの程までこそ、おことにもつつミ
たりしが、初事とハいひながら、身ごもりし身程、くるしき物ハ
なし、牛若君にも其事告やりしを、文にて大方のおとづれ、
ただ一度ばかりにて、ミつからハあからさまにも、影たにだに
見せ給はぬハ、今ハ心がハリやし給ひつらん、白糸殿も恋
しおもふふぜいなりしが、もしハ我よりさきに、武蔵をさし
下りやせしとも、思はるゝなどの給ふ、平次聞てかへすく
承ハリし所、げにく心あさき御方にておはす、しかし武
蔵への下向ハかなひがたし、道塞がりて候といふ、とハいかにさ

らバわらハも、下られぬかとの給へバ、さん候、只今おそのが申
すを聞くに、武蔵に領所ある、男衾殿、まして目代の権
威にて、道々に人をつけて置たれば、牛若丸ハ誠に籠の鳥
とも申ぬべしといふ、瑠理君驚きて、顔の御けしきかはれ
バ、さやうに驚かせ給ふな、牛若丸ハ武勇すぐれさせ給ふと
承ハれば、御命恙なかるへし、たゞ御身の上こそ大事とは
なりたれ、今ハ跡も先も、いづれの道筋も危くて、上下な
りがたし、それに就て、某しが存念、聞えたてまつりたけ
れと、御心のほどはかり兼てといふ、何にもあれ申せとの給へ
ハ、平次いひけるハ、漢やまとの耳なれぬ事、引出る迄もなし、
牛若君の母君、常盤殿をハ、貞女と思給ふかやまづ薬をの

ませたまへ、あたゝめかへして参らせんとて、やがて持て参
れば、瑠理君何心なう一口のミで、これハ例の薬にハあら
ぬやうなりとて、のみさし給ふを、などさる事候ハんのませ
たまへといへど、猶いな／＼とて頭ふりつゝよゝとのミ泣給ひ
て、果しなければ、平次せき立て、あしゝとにハあらぬ人の情
を、情ともおぼさでもどき給ふか、物しらずのしれものどハ
御身の事よ、和子が腹にあらん程ハ、帝王の御召ありとも
参らるべきや、ぜひにのミたまへよとせむる、扱ハ安神散
といつはりて、墮胎の薬飲せんとにや、うけがひもせぬ我
に、おしたちたる仕業ぞとて、腹立てたゞ泣に泣給ひて、
いかにいふとも、あやしき薬ハのまじとて、起あがりて薬を

盛りし腕をとりて、打かたむけんとし給ふを、こぼさせじと
取りのけて、俄に眼大きくなし、いとにくげにねめつけ
て、かならずのミ給ハぬかといへば、頭打ふりつゝ、瀧のように
落くる涙のごひかねておはす平次男たけきをあげて、
かくまで物しづかにいふを、承引せぬくさり女こそ悪けれ、
うけひかぬとて、其俣にて置べきかとて、居丈高になりて
立かゝる、拳もふりあげぬべきけしきなれば、瑠理君は、
かなしさおそろしさやる方なく、主に向ひて無礼を
ふるまふ、頼もしからぬ汝ハたのまじ、妹こそやさしけに
見ゆれ、いざ正屋へいかんとて立あがり給ふを、遁さじ
とて引とむる、非力なる上臈の事なれば、とみに引

ふせられたまへど、菓はいかにものまじとて、口を掩ひつゝ、
更に手を放ちたまハねバ、さしも糸のやうなる腕をね
ぢあげ、いづくよりか捕縄出して、高手小手にしたゝかに
くゝりあぐれば、瑠理の君水のやうにわなゝきてあせりた
まへど、せんかたなく、誰かある助けてよ、をう／＼と声立
給へど、雨風つよう吹しきれば、表へハ聞えず、御宿直仕り
て是に候ぞと答へて、次の間より立出る、誰ならんと見
給ふに、過し日に勾引出つる、貉辨次にていひけるやうハ、
仰のごとく余所ながら慕ひ参りしに、さきのほどより舌
なめづりも仕あきて候、今ハはや仲景が方ならでハ、療
治なしがたしといへバ、丈六かき居し平治男、喚く口をバ

是にてふざけとて、菓の碗をとりてやる、今一人の狼小十も
出来て、二人して瑠理君を、仰むけにして飲せまいらす吐
んとし給へども吐もえず、苦し／＼とうめき給ふ、鬼の飲する
銅の湯もかくやあらん、画にかける地獄のさまも、此呵責
にハマさりぬべしやハ、無慙といふも余りある有さまなり、
瑠理君息の下にも、扱ハ平次と名のりしも、猶同し連
なる盗人かとの給ふに、平次から／＼と打笑ひ、あざけりて
いひけるハあつはれ賢女や、よき推察なり、我こそ浅生の
松若といふ、盗人の張本なれ、此二人の男して、汝等二人を
盗ませて、男衾殿に参らせんとせしに、折わるく男衾どの
武蔵へ下りつれば、かしこまでくだらんとて、かくハとから

ひしなり、されどとくより孕める事を知りたれば、それつ
れ行んに八價の金少ければ、我武士に身をかへて心を
ゆるされしが、けふ貉がいふをきけば、源太夫どの八信濃に
おはすといふ、よりて姨捨の長者に事よせて、又信濃へつれ
行んとハせしなり、されば安神散と名つけて、墮胎の薬
飲せんとせしに詞やはらかなる程にのまねば、かう縄
目の痛きおもひをバさせつるぞといふ、狼小十聞て大
将のすかし給はんとて、匂ふや薫るのやさしき仕業
ハ馴も給はぬ御ふるまひ、扱々御骨折にて候と挨拶
をいふ、にくげなる事限りなし、さて深くもたくミ
たるかな、さらハ白糸をもちふかひなくなしたらんなど

の給ふほど、腹痛ミ出て、死ぬべきやうに覚へたまひて、
いと苦しげに、悪魔よ鬼神よ我命取らんとする
な、今生にてこそ報ハれね、天道に訴へて、今只今
おもひしらせんとて、うらめしげに見やり給へば、貉弁次
人々に指さして、あなおそろしの御眼ざしや、あれ見た
まへといへば、人々も大口明て笑ふ、貉またいひけるハ、天
魔鬼神をさへ、何ともおもひたらぬおのれら、娘の一人
二人ハ、指にて石などを扱ふよりも安し、されど女人ハ
殺しハせず、白糸とやらんハ、今ハ追分の宿のけいせい
となりてありそれよりも汝ハ平家の役人源太夫どのに
愛せられんとする、此上もなき果報とおもひて悦を

こそいふべけれ、怨をいふ道理なし、苦痛するのもしば

しの程よ見よ、今の内に牛若丸か子ハ、一滴の露と

消果なんといふ、ミなくあなうまき計よ、あすハ信濃

へ連行て、余多の恩賞にあつからんとて、手打たたき

てよろこびしが、先酒のミながら詠てんとて、盃の

順のなかるゝ間に、瑠理君の面色忽にかはりて、息も

絶ぬべき程になれば、松若さしよりて、扱もあやしや、

いかなる事ぞ、此墮胎の薬といふハ、熊坂殿の姫が製

せしなるが、此薬久しく程経て、毒薬となりしならん、

さらバ毒解す薬よといへど、人をこそ殺せ、生す薬ハ

もたす、見るが内に毒氣、全身にわたりて、紫勝の斑

色になりて、はかなくも絶入り給ひぬ、三人顔見合せて

仕なしたり、命の宝失ひてふたたび返らん道理もなし、

巧ハすべて相違しつとて、あきれにあきれたれど、更に

せんかたなし、せめてハ路用の百両あればそれだに分ち

取らんなど、ミなくいひをるに、松若酒に酔けるあまり、さ

るにても骨折つる、甲斐もなくてくやしや、殷の紂王

武烈の帝の事ハ、伝にのミ聞て目にハ見ず、何も酒の

む肴なり、いざ孕ミ女の腹割て見よといへバ、狼小十庖

丁刀とりて来たる、抑瑠理君元来公卿の御種にて、

長者が家とても玉の簾、錦の帳ハ都にも替らさりし

に、などやかく、ゆくへもしらぬ旅にさすらへたまひて、非道

の刃やいばにかかり給ふ事たくひすく、類おんみ少うへなき御身まつわかの上ななり、松若はいよはいよく
酔よひて、御辺ごへん等らが仕業しわざ手てぬるからん、鯉こひにまさりし女をんなの
庖丁ほうてう、いで膳部ぜんぶの男おとこにならん、わが料理りやうりの手際てきを見よと
て、件くだんの庖丁ほうてうとりて、雪ゆきのやうなる膚はだへに当あてぬ、磨とぎすましたれ
ども、庖丁ほうちやうの事ことなれば、太刀たちのやうにハ鋭すどからず、鈍にふき刃やいばに
て皮かを裂さきる程ほどハ、物ものしる事ことなき死人しびとにておはせど、
此この苦痛くつうハ身みに答こたへやすらん、割さはてハ庖丁ほうてう取直とりなおし、皮か
を左右さゆうへ剥はけけるに、さつと吹来ふきくる村雨むらさめしぶき、物もの
(隙ひま)より吹入ふきいりて、燈火とも残しびのこ、消果きへはて、血ちの流ながるゝも
見えみわかず、火ひを打うちつけにといふ折をりしも、家いへのくまく
昼ひるのやうに明あかくなり、耳みみもとに雷らいの響ひびきして、死骸しがいの腹はらの

中なかより、ひとつの陰火あんくハ飛出とびいぬれば、ミなくあなやとお
どろきて、さながらそこにひれふしぬ、陰火あんくハハ奥をくの間ま
持仏堂ちぶつだうに向むかひて行ゆぬ、盗人ぬすびとほどの者ものなれば、さすがに
魂たましひをバ失うしなへて、松若殿まつわかとのにハ無事ぶじにておはすか、狼貉おほかみむじなも心こころ
づきしか、互たがひにをいくといふばかりにて、あやなき闇やみの
面おもてたにも見みえす、雨風あめかせハますくはげしうなりぬ、空そら
ハ墨すみをぬりたるやうにて、頭かしらさし出いづくもあらぬけしき
なれども、正屋おもやの方かたより、人ひとの来くる音おとするやうに聞きゆれ
バ、心こころのなしに驚おどろかれて、長居ながあせんハ怖おそろし、且かつハ化ばけ
物ものに命いのちやとられんとて、やうくに莖むしろやうの物もの、たづね
出いたして、蓑みのにも笠かさにもして、たとるく表おもてに出いて逃行にげゆき

ぬ、あはれおそろしき夜のさまにぞありける、

○瘡 瘡

此留りたる家、あるしをいかなる人ぞと尋ぬるに、過し頃

牛若丸の木曾へつき給ひし後、加勢の者語らはん

とて、上野へ下りて、主従の契約ありし、伊勢三郎

義盛なりけり、此三郎が父ハ、二見の者にて、大神宮の

神主なりしが、いさゝかの事に非せられて、此国に流され

て死失ぬ、三郎遺腹の子にて、さしつゞきて母にも別れ、

父が本国なればとて、伊勢を苗字に名乗つゝ、幼より

武芸を好みて、またなき若者にぞ生立ける、主なき身

の便なきまゝに、兵法の指南をせしに、弟子どもいと多

あり、然るに盗人どもの騒ぎにて、いづ地も静かなら

ねバ、村の者どもよろづ衣食のまかなひして、防の大將

にぞ仰ぎてける、その身ハ牛若丸の臣下にてありながら、

君の事起し給はんまでハ、爰に待べき契約にぞあり

ける、此頃下野の国にも、熊坂が残党あれば、其国のもの

どもに頼まれて、退治しにいきたりしが、是も松若が

泊りし夜にこかへり来り、弟子の百姓どもおもひく

出立して、長刀手鉾やうの得物ひつきげて入来れば、

妻のおその出迎へて、平げ給ひしかよろこばしやと云

大將の三郎打笑て、小盗人の手にたらで、腕かゆき

心地すとて、腋をかきながら、しかし此あたりへ、浅生

の松若が、武士に似せて、女を連れて来りしとの
風聞あり、引くゝらんとおもへども、いまだ隠れし其
巢を知らず、さすがに勞れしやうなれば、まづ今宵ハ
勝しいはひの酒打のまん、人々も休ミ給へといへば、
支度しつる酒肴とり出つ、おそのおもふに、奥なる
家へ宿しおゐたる兄ハ、その松若とやらんにて、あの
女君ハ、かどハかし来つるにやと、ふとおもひよりぬ、常
にもよからぬものとして、出入さへさせねハ、三郎に対面の
なきこそ、中々によりけれと、おもひ居り、食物など
のあつかひして、酒宴始めれば、其間を見合せて、さら
ハ先けしき見て来んとて、奥の戸口よりひそかに出

行ぬ、かくとハ知らて三郎初、人々も酔ひあきてをり
しが、夜も更ぬ酒はや闌なり、いざ暇給はらんといふ、
雨風はげしければ、泊り給へと三郎のいへば、泊るもありい
な旅立て、日数たてば、妻子の事も、心やましとて帰るも
ありて、酒宴ハ名残なく果ぬ、扱もおその殿の見えたま
はぬハ、いづれへ行給ひけんとして、居残りし者ども、くまく
尋捜せども、更に見えず、三郎いひけるハ、さのミ尋給ふな、
此空のけしきに、いづ地へか行ん、是ハ人々の酔られたる
を見て、かれ下戸なれば、強らるゝがうるさくて、塗籠へ
など隠れしならん、打置給へとてみなくとも共にねたり、
夜もあけ雨風もやミて、みな起出ぬれども、猶おそのハ見

えず、外の方へ出し者の走り入りて、離れたる家の戸口、
あけはなちあるといふ、扱ハあやしやとて、三郎さきに立
て、ミなく／＼いきて見るに、竈焚さし、膳部の雑具とり
散したり、中の方にハ、褥など取出てあり、扱ハ盗人のよんべ、
爰に宿りたりしと見ゆるそ、おのれとかゝりし網代の
魚、もらせし事の口をしさよとて、あたり見廻せば、黒く塗り
たる手箱あり、金銀にて藤の歌を、あして書にまかせたり、
いづくより盗ミ来にけん、ゆかしげなる物なり、藤原氏の
人や持けんとして、白なミのよせ来し跡の二見ぞとて、明て
見れば、香盒化粧の道具など、くさ／＼ありて、中に牛
若浄瑠璃、あるひハ、白糸など名のりをしるして、紙屋紙

に、歌あまた書たるがゆひ合せてあり、三郎兼て瑠璃君の
事ハ、牛若丸の物がたりにて聞たれば、矢矧より媛君の御
調度ども、盗ミ来りしなるかとて、頭かたむけてあやし
むに、今一人の弟子の男あはたゞしう走り来て、息を
切りつゝ、裏路なる瀬寝川にて、曲ものを見付つるが、捕
損ぜしといふ、何曲者ありとか、それいかにしつると問へば、
かの男衣服につきし、ぬかりの土かき払ひながら、某し
おそのゝ君を尋ね歩行たるに、たくましき男、上臈の
きたる女の死骸を持来て、藤を縫にしたる衣装引はき
て、あやしたる血を洗ハんとすれば、いで盗人よとて、うしろ
さまにむずとくミたるに、かれも強力の者にて、引くミて

しばし揉合たりしに、下に打置つる死骸へ倒れかゝり
て、死骸八川の中へこけ落ぬ、あれ／＼とおもふほど、思
はず互の手をゆるめて見るに、水のいきほひするどくて、
忽に流れ行ぬ、盗人ハ所詮叶ハじとや、足早にはし
りにたれば、そのまゝに逃しつるなりといふ、三郎聞
て何といひ給ふ、その小袖藤を縫ひにせしとか、さん候
といふに、三郎けしきをかへて人々見給へ、此手箱の蒔
画も藤なり、扱ハ瑠理の君ハ、こゝに宿りし盗人の殺し
参らせしか、また見参にいらぬながら、瑠理君ハ主
なる方の北方なり、目の前のおそのがおらぬよりも、
是こそ一大事なれ、扱も／＼とてうちおどろ

きぬ、されど水のなかれも、盗人も追かけんにも及ばし
とおもひ、男泣に齒を嚙ながら泣けば、人々もしらぬ事に、
涙もやふしぬ、三郎やゝ思案せしが、主の敵ハそやつ男に相
違なし、時日に移すべきにあらず、後に捕てんつとひて来
て給へといへば、人々承ハリぬ、今かならず参り来て、おその殿
をも尋てんとて、人々ハ帰る、三郎ひとりになりぬ、逞しき
やうなれど、さすが心うるハしき男なれば、まづ御あかし
参りて、回向せんとて、奥の持仏堂を見れば、年ふりたる
髑髏あり、こハ何物ぞとおもふに、傍に美人の姿うつしたる
紙画あり、その衣装を見れば、藤の模やうを画きたり、殺さ
れし女の趣きなれば、三郎いよ／＼不審になりて、例のか

(符) かしらかたむけて、ひとこと独言しけるハ、このはくこつ此白骨ハこれ何人なる
かハしらねども、かたはら傍にうつし画そひて、いっしゅ一首の歌さへそへて
ありといひさまよミて見るに

きたみなみ北南ながれての世のおもひにもしづミハはてじ藤原の

(末) すへとあるに、あらむしや三郎荒武者ながらその心こころをさととり、なんけほくけ南家北家

をよミ入れて、かつ且ハ藤ふぢに洩をいひかけたるも、ふる古くよりある

ためし例ながら、ころ殺されてかく川かハへ流され給ひしかバ、うた歌の趣おもむきにハ

ちが違ひて、しつ沈ミはて給ふなめり、るりきみ瑠璃君さすらへ給ふ御旅おんたびの

あいだ、ミづミづからうつし画ゝせ給ひ、て手ならひに歌うたをもそへ

たまひしならんが、ゆくすえ行末をいはひ給へる御心みこころのかひもなしや、

ゑいかうまづ回向するに位牌ゐはいともなしてん、おもふにこのはくこつ此白骨も、君きみの

(親) したしうし給へる人なるべし、ゑいかうともに回向し奉らん、こゝに
うしわかきみ牛若君の賜たまハリし、ひとつと一本とかいへる名香めいこうあれば、このゑいかう此回向こゝにハ
うちあい打合たりとて、とりいでやがて取出て、がつしよう三郎まづ合掌して、君きみには

たいめんまだ対面奉らねど、とのわが殿きたの北かたの方しゆくんにて、もちろん主君なる事勿論に

ておハす、世よに神かみも仏ほとけもおはさぬやうに、あわれ哀なる御身おんみの果はてや、

しかし何事なにごとも、よかりの世(覚し)の事とおほして、らいせ来世の契ちぎりをた

のミて成仏じようぶつしたまへ、とんしやうぼだい頓證菩提といひつゝ、しやうこう焼香すれば、

けふりたち煙立のぼるとひとしく、おもひ思なしにか、かみゑ紙画も白骨はくこつも動うごく

やうなり、はくこつ白骨ハ誠まことに上うへあがり、なを猶も打念うちねんしてたゞ迷まよハせ

給ふなど、まなこ眼を閉とぢて念仏ねぶつ申、みまたあきて見れば、はくこつ白骨はなく

なりて、けふ煙りの末すへに画ゑのやうなる、ひめぎみ媛君の姿すがたさだかにうつれ

ハ、あなうとましや哀れや、また中有におハしたまふか、浮
ませ給へと、数珠すりたてゝ念仏申す、折しも跡の方
にて、我夫三郎殿、園こそ媛君の御供申つれといへば、又
驚きてあな哀、和御前も盗人の為に、黄泉の人とな
りしか、かへすくも哀れなり、南無阿弥陀仏といへば、
おその走り出て、君にハ媛君の死なせ給ひしと覺すか、
媛君ハすこやかにておはすといふ、とハいかに生きおはす
かとて、心を定めて見れば、二人ともに、さながら姿あざ
やかなり、大に驚き且悦びて、いつはりいはぬ人の物がたり
つれば、我ハ死なせ給ひしとのミおもひしなりとて、ありし
次第を語れば、瑠理君もけしからぬ事に覺して、語り

たまへるハ、わらハ初かどハされてより、平次といふ男の
助けつれど、それもあやしき盗人のやうにて、いかなる
恥をか見んとおもひし折、此おその殿の来て、隣の家
へ伴なハれて後、何事も知らぬなりと給ふ、おその又
いひたるハ、いとく面目なき事ながら、其侍めかせし盗
人ハ常にも語り申せし、心直ならぬ兄にて候、親なる
者の勘当受て後、盗人になりたりと風聞の候ひしが、
されど武士になりたる姿ゆえ、よもそら事にハあらじ
と存して、君に隠し参らせて、此明家へ宿せしが、
君か宵に語らせ給ふ、盗人のていたらく、よくも件の兄
に似たれば、あやしくて葉煎ぜる折にまいりあひて、

浅生あさふとしるせし反古ほうこの端はしを拾ひろひしかば、いよ／＼あや
しと存ぞんし、なやましと仰おほせ給たまふ、瑠理君るりきみを奥おくの間まにつ
れ参まひらせて、やうすを問とひ奉たむかるに、矢矧やはぎの君きみなること
知しりたてまつり、大切たいせつなる御方おんかた、こゝに置をき奉たむからん事の
危あやふく、さりとして君きみにかくと申まをさんハ、兄あにの事こと訴そ人にんする
やうなればまづ今宵こよひひとよ一夜すぐを過すしてとぞんじ、雨あめに
ぬれながら、隣となりの家いへへいさなひ参まをらせ、夜よすがら互たがひに
牛若君うしわかきみの御事かた、語かたりあかし候まをひぬ、さるによべ此家このいへに
雷いかづちのようなる音おとの聞きこえしがほどもなく盗人ぬすひとめきし
者もの逃にげしと、隣となりの下男しもおとこの申まをせば、今ハ心安こころやすしとて、
まづこゝへ連つれたてまつりしなりといふ、三郎大おほきに不ふ思し議ぎ

をなして、かへす／＼も物語ものがたりの始はじめ終おわりハ符合ふかうしつ、しかし
怪あやしむべきハ瑠理君るりきみにかはり参まをらせて、殺ころされし女をんなハ、
誰人だれひとならんといふに白糸しろいとがなくなりしも、其盗人そのぬすびとしわさ
にかと心こころつき給たまひ、白糸しろいとが事こと語かたり出いで給たまひて、わらハに
かはりて、命失いのちうしなひしにかとて、泣な給たまひつゝ、かの紙画かみゑを見
たまひ、これハ白糸しろいとにかゝせて、人形にんぎやうにそへ置をきし物ものなるが
いかにしてこゝにありしとて、あやしかり給たまひ、かの北南きたみなみの
歌うたを見給たまひて、是もわらハが書かきたるにあらすとのたまふ、
さてハ君きみの御歌みうたにてハなかりしか、されど沈しづミハ果はてじと
候かみほとけハ、神仏かみほとけのかく救すくひ給たまはんとのしらせならん、御行ゆく
すへめでたからんとて慰なぐさめ奉たまりつゝ、三郎白骨はつこつの事ことをも

さま／＼にあやしミながら先恙なうおはせし事のうれ
しまよとて、さま／＼の物語して、さて旅の勞れ休ませ
たまひてん後矢矧へつれ参らせんといふに、瑠理君そ
れハうれしき事なり、されど三河にハ、源太夫どの、妨
あれば、たゞ使にていひやりてたべ、其文にハ妾か不孝の
心から、かくさすらへしが、おことが助にてながらへあること、など
告奉りてたべ、わらハが方よりハ、聞えたてまつりにくし、
おことよきに、わひ言書てたべ、扱わらハをバ、木曾の牛若
丸の方へ、伴ひくれよとの給ふ、三郎それもいと安う候とて
其日すなハち矢矧へ飛脚出し、又其序ながら、木曾
へハ、瑠理君の御文奉れ給ふ、三郎また申けるハ、木曾へ

いらせ給ふ迄も候ハす、御文見給ひなバ、牛若君のこなた
へおハし給はん、それを待て心おかず、こゝにおハせかし、此三郎
が柴の庵ハ、鉄城のごとくにて、いかなる徒者も、指ざし仕ら
ずと申す、瑠理君此度ハ誠に頼もしく、うれしく覺すそ
ことハりなり、矢矧の使のまだ帰らぬほど、五日はかり立て熱
氣常ならず、おはせバ大事の御身とて、もてさハくこと大かた
ならずとて、医師よびて見すれば、是ハ此ころ流行の疱瘡
にておハすといふに、日をへずして目も鼻もわかぬばかりに腫
て、やがてけしからぬばかり、いもがさ出来給へり、これハいかにと
いふに、医師のいひたるハ、妊身にてかやうに熱氣烈しう
おハせば、もしハ墮体し給はん、さりなからそれハ、某か家に奇

方ありて胎内たいないの御小児おしやうにをなきものにハ仕つかまつらず、されどかゝる
わろき筋すじの庖瘡ほうさうにてましませば痘痕みつちやおほ多く色いろなども
黒くろうなり給ふべし、それハ某それがしが知らぬ事なりといふ、三郎
夫婦口ふうふくちを揃そろへていひ給ふ迄までもなし、御腹はらなる若君わかきみこそ大
切せつなれ、御見みめにかゝハるべき事かハ、よきに療治りやうぢたてまつりし奉
給へといふ、かくて定まりし日数ひかずハ立たてど、筋すじわろければかせ
兼かね給ふ、さるにまた一ツひとの難洩なんしうの出来できそひて、膈かくの病発やまひおこり
給ふ、庖瘡ほうさうさハやぎ果給はてはず、体たひつかれ給ふなるに、朝夕あさゆふの御
物ものさへおさまらねば、医師くすしこたびハ御命いのちにもや及およばせたま
はんなどいふ、ほどに反胃ほんゐの症せうしきりになり、日にそへて青
ミやせ給ひて、たゞよハりによハり給ふ、人々ひとびと歎なげき悲かなしむに

糸いとのやうにほそりて、あるかなきかの御姿みすがたなるが、つひにこと
切きれれて、失うせさせ給へば、いそぎ医師くすしよびよせ、氣きつけの薬くすり
針灸はりきうなども験しるしもなく、今ハ救いまひ奉すくりがたしとて、事切こときれ給ふ
になり、人々ひとびとの歎なげきあふ所ところへ金売かねうり吉次きちじ参まいりぬ、初はじめて客人まろうと
ながら、かゝる折おりなれば互たがひに名乗なのりあふばかりにて、先能まつよきところ所ところにこ
そ来き給ひつれ、媛君ひめきみこなたへおはし給ひてより、つねに
御方かたさまの人を恋こひ給ひしに、登のぼりかさねたる、御大病ごたいびやうにおハ
して、今ハ絶果たへはて給ひぬといふ、吉次きちじハさすらへ給ひし故ゆへを問とぶ
までもなく、我妹わがいちもうとしらいと白糸しろいとのやうにおもひ奉まもれば、まして悲かなし
くて、御枕まくらのあたりによりそひて、叶かなはぬまでもと大おほきなる
声こゑして、吉次きちじこそ参まいりて候へといへハ、待まちに待まち給ひし人ひと

の聲御耳こへおんみみに通とりもやしけん、瑠理君るりきみくるしげに、御目めを
ひらき給たまひて、久ひさしくての対たい面めんかな、わらハ心こころからさす
らへて、つひに白糸殿しらいとどのをも、いづ地ちへかなき物ものにしなし、又
もがさや、膈かくの病やまひと打うちかさね、今しハ死しぬべきなり、されバ
今いとめうしわかきみ一目牛若君みを見奉みらぬこそまよはじと、おもふ
中なかの迷まよひなれ、されど白糸殿しらいとどのも、牛若君うしわかきみをバ里若殿さとわかとの
に似にしとて、羨うらやましげにいひ給たまふ、よき中なかながら生いきたる程ほどハ
さすがに妬ねたましくもありつれど、あよの世よにてハふたりにて
仕つかへ参まいらせん間あいだ、白糸殿しらいとどのをさがしもとめて、牛若君うしわかきみに
参まらせてたべ、こハ白糸殿しらいとどのをおもふばかりにてなく、わら
ハに似にたる人ひとなれば、わらハがなきとても、父君ちちぎみも牛若君うしわかきみも

すこしハ慰なぐさめ給たまふべきをと、かうの給たまふをもうく度たびにも、
引ひきり／＼の給たまひて、詞ことばの末すへハ息いきの下したなり、ありあふ人々ひとびと
いよ／＼涙なみだにむせび、鼻はなこへ声こゑになりて、おとなしくも仰おほ給たまふ
物ものかな、やごとなき筋すじハ、筋すじほどありて、今なハの御おんきハにも、
ことうるはしくの給たまふものかなとても泣なく、吉次心きちじこころづきて、
かゝる事こととも知らで候しひしが、おのれこれへまゐるミち
にて、都みやこにて相あひしりし医くすし師あに逢あひつるが、遠とほくハ参まり候まじ、
せめてハあれを呼よび来きて、見み奉まらせてんとて、たちはしりて
出いでて行ゆぬ、されど沙羅桑樹しゃらさうじゆのためしもあれば、神かみ仏ほとけの御み
力ちからにも救すくひかたかるべくや、哀あはれなりし世よのさ（性）がなりや
浄瑠理姫物語卷三